

動き出した 東北

— ③ —

東北大学金属材料研究所 川添研究室

仙台市青葉区片平に位置する東北大学金属材料研究所。あの日、計算材料科学の第一人者である川添良幸の研究室は激しく揺れた。

ため無事だったが、7階の川添研究室は書物類が飛び散り、手が付けられない状態になっていた。

リアンレストランで少し遅い昼食を取っていた。地震に遭遇したのはその時である。

いから戻っておいで」と川添は優しく送り出した。原発事故が明らかになるにつれ、一時期、外国人が日本から極き消えたかのように姿を消した。

しかし、それは誤解で、実際は違う。仙台が原発事故現場から50マイルの範囲内にあるというだけで、各国の政府が動いたのである。

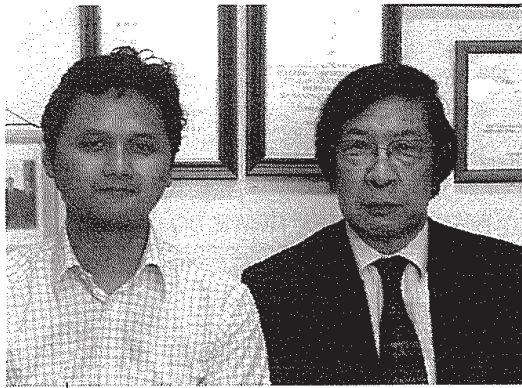
地震の混乱が少し落ち着き始めた4月上旬、各国政府も状況を理解し始めた。留学生が一人二人と研究室に戻り始めた。マヒュディンも例外ではない。

そこには大きな旗がはためいていた。その旗にはインドネシア語でこう書かれている。「ぼくらにできることは小さいですが、あなたが感じていることは私たちも感じることができると。」

スーパーコンピュータは1階に設置していた

元に戻った国際色豊かな研究室

人としての生き方も教える教育方針



時を同じくして、インドネシア出身の国費留学生、川添研究室修士課程2年のムハマド・ハリス・マヒュディンは、大卒近くのイタ

らの国外退避勧告だ。仙台から成田空港までのバスも、成田からインドネシアまでの飛行機ドネシアまで、政府がチャーターするといふ。戸惑うマヒュディンに、「いつでもい

とがあつた。それだけではない。東日本に開設していた現地法人をクローズし、西日本に移転した外資企業もあつた。その足並み揃えた行動に、我々日本人は裏切られたような思いを持ったものである。

からの国外退避勧告に従い、マヒュディンと同様に多くの外国人が日本を去つたに過ぎない。日本のみならず、世界の計算材料科学の水準を上げようという志を持つ川添。それだけに彼の研究室は国際色に彩られて

インドネシア地震の体験を持つマヒュディンは、4月上旬からボランティア活動にも意欲を見せた。毎週土曜日、1チーム5、6人の編成で鮎川浜、気仙沼、東松島、多賀城を訪問。炊き出しでイン

マヒュディンは関西の大手電機メーカーに就職が決まった。今年9月、マヒュディンは川添の元を巣立ち、新たな人生を歩み始める。(文中敬称略) (産業タイムズ社 事業開発部 松下晋司)

川添良幸教授(右)、マヒュディン氏